

一五、河合直樹

創作 草書 『望』 3. 5尺×4. 5尺

前作の『兆』につづき、
前向きなイメージをも
つ言葉を書きました。

兆候は感じられても
望みどおりのものが手
に入らないもどかしさ
にとり憑かれてしまい、
無念です。



一六、梅野佳奈・河野宏明・平川真弓・西原英臣

合作・創作 行草書 2尺×8尺の四連

『江梅 杜甫の詩より』『早梅 齊巳の詩より』

『梅花 王圭の詩より』『嶺梅 齊巳の詩より』

「梅蕊臘前破梅花年後多絶知春意好最奈客愁何雪樹元同色

江風亦自波故園不可見巫岫鬱嵯峨」(梅野)

「萬木凍欲折孤根暖獨回前村深裏裏昨夜一枝開風遞幽香去

禽窺素艷來明年猶應律先發映春臺」(河野)

「冷香疑到骨瓊艷幾堪餐半醉臨風折清吟拂曉觀贈春無限意

和雪不勝寒桃季有漸色枯枝試並欄」(平川)

「蠻烟無處洗梅蕊不勝清顧我已頭白見渠猶眼明折來知韻勝

落去得愁生坐入江南夢園林雪正晴」(西原)

最近は筆を持つのも厭わしく思っていたのですが、合作な

ので挫折できず、やむを得ず書き始めてみると、意外にも愉

しみながら書くことができました。合作に誘ってくれたこと

に感謝です。(梅野)

唯一まともに臨書したことのある『楽毅論』で学んだ独特

な線の、抑揚、や、うねり、そして今しかない若さ(…22

才ですけど何か?)から出る、勢い、を紙面上に展開するよう

心がけました。(河野)

初めての二八作品製作となりました。合作で、それぞれの

個性を出しあっています。一人、個性を出し切れなかった

感があります。まだまだ自分の字を書くには時間がかかりそ

うです。(平川)

作品製作で一番苦労したのは文字の形、大きさ、配置でし

た。創作作品という性質上、書けば書くほど最初に思い描い

ていたものとは違っていく事に戸惑う所も多々あったが、臨

書作品を完成させた時とは違った達成感を味わえたように思

えます。(西原)

梅蕊臘前破梅花年後多絶知春意好最奈客愁何雪樹元同色江風亦自波故園不可見巫岫鬱嵯峨 杜甫詩江梅佳奈

萬木凍欲折孤根暖獨回前村深裏裏昨夜一枝開風遞幽香去禽窺素艷來明年猶應律先發映春臺 齊巳詩梅野

冷香疑到骨瓊艷幾堪餐半醉臨風折清吟拂曉觀贈春無限意和雪不勝寒桃季有漸色枯枝試並欄 王圭詩梅野

蠻烟無處洗梅蕊不勝清顧我已頭白見渠猶眼明折來知韻勝落去得愁生坐入江南夢園林雪正晴 西原

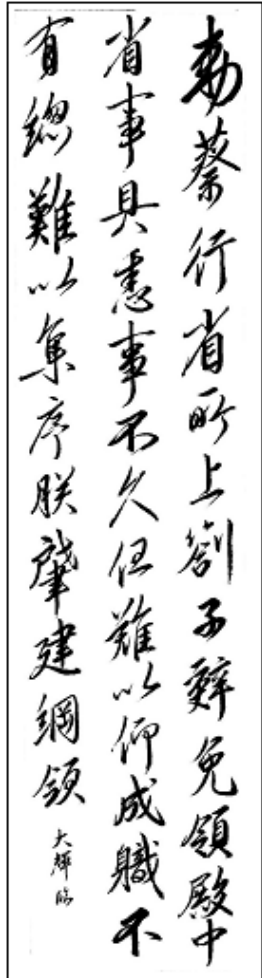
一七、原山大輝

臨書 行書 超估『蔡行勅卷』 2尺×8尺

「勅蔡行省所上劄子辞免領殿中省事具悉事不久任難以仰成職不有總難以集序朕肇建綱領」

原本の持つ鋭さに惹かれて臨書しました。その雰囲気は少しでも出ていれば幸いです。

二八には初めて挑戦しましたが、紙が大きい分伸び伸びと書けてスッキリしました。



一八、河合直樹

臨書 行書 顔真卿『祭姪文稿』 2尺×8尺

「天 禍いを悔いざれば、誰か荼毒を為さん。爾が残に遘うを念えば、百身も何ぞ贖わん。」

この法帖にめぐり会った頃は、あまりの豪胆な筆意に只々踊らされていましたが、折に触れて接していくに従い、藝術としての書道を体現するかのとき書風に強い魅力を感じるようになりました。今となつてはお気に入りの法帖のひとつです。



一九、白田全弘

臨書 草書 傳山『草書軸』 2尺×8尺

「園廬僻陋那堪比謝野幽微不足攀何似 峰卅六長隨申甫作家山」

くるくると回るような線が特徴の傳山の書に惹かれ、臨書に挑戦してみました。随所に見られる独特な線の「揺れ」を表現するのは予想以上に難しく、苦労しましたが、何とか傳山らしさを出すことはできたかなと感じています。



二〇、三幣剛史

臨書 隸書 楊峴 半切二連

「天星隊(墜)地能為石 玉水清流不貯泥」

楊峴の隸書を濃墨と羊毛で重厚な雰囲気にしてみました。臨書というよりも創作に近くなつてしまいました。楊峴独特の趣を感じていただけただけでしょうか。

天星隊地能為石

玉水清流不貯泥

二一、稲垣紀子

臨書 行書 黄庭堅『松風閣詩卷』 半切

「釣臺驚濤可晝眠」

卒業作品として記念に残る作品を仕上げようと思いましたが。ゴージャスな紙なので贅沢な気分ですけました。

釣臺驚濤可晝眠

紀子臨

二二、津島由衣

創作・行書 『江山滿花柳』 半紙サイズ

「江山滿花柳」

「山や川(江)に花や柳が咲き誇(満)っている」という意味です。

よく書かれている課題ですが、それを小品で表現してみました。単調にならないように心がけました。

江山滿花柳

二三、得能麻希・福永円・古俣慎也

合作・臨書 仮名

伝紀貫之・紀友則『寸松庵色紙』 伝小野道風『継色紙』 全紙

「秋かぜのふきあげにたてるしらぎくは

花かあらぬかなみのよするか

秋の夜はつゆこそことにわびしけれ

くさむらごとにつゆむしのわぶれば

あきはぎの花さきにけりたかさごの

をのへにいまやしかはなくらん

なつのよはまだよひながらあけにけり

くものいづこに月かくるらん」

「わがせごころもはるさめふるごとこのべのみどりぞいろまさりける

あまのがはあさせしらなみたどりつゝ

わたりはてぬにあけぞしにける

むめのかをそでにうつしてとめたら(ば)

はるはすぐともかたみならまし

わたつみのかざしにさけるしろたへの

なみもてゆへるあはぢしま山

いろは歌から始めて、やつとここまですたどりつきました。

ど素人に変わりはありませんが、貫之さんと道風さんの字を

通して平安の香りをほんの少し感じられた気がします。(得

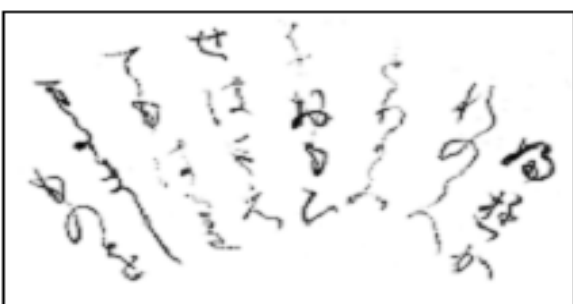
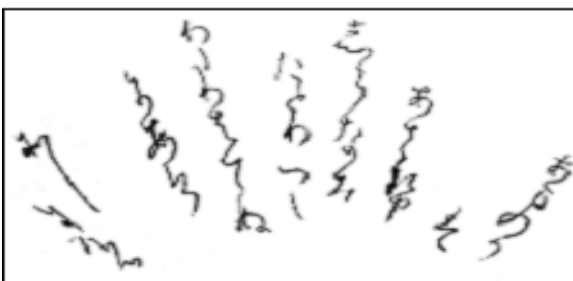
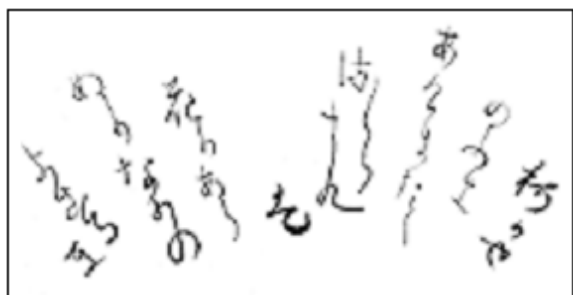
能)

仮名独特の線のやわらかさや流れるような動きを意識しつ

つも、全体的に弱々しくならないように気をつけました。扇形

の紙についても、詠まれた和歌に合う色を選ぶよう心がけまし

た。(福永)



二四、門脇友維

臨書 楷書 『楽毅論』 半切 1/2

今回で、楽毅論を書くのは二回目です。楽毅論は書いていて

とても楽しいので、機会があればまた挑戦したいです。

夫求古賢之意宜以
大者遠者先之必迂
迴而難通
友維臨

二五、砂川祐子

創作 調和体

『支えてくれた人へ』

全紙3/2

面と向かって言うのはちよつと恥ずかしいけれど、こんな形でなら伝えられそうです。



二六、吉田幸広

臨書 楷書 柳公権『玄秘塔碑』 半切

「和尚は其れ出家の雄ならんか。天水の趙氏は、世よ秦人たり。初め母の張夫人梵僧を夢む。謂いて曰く、当に貴子を生むべしと。」

このような作品展に出品するのは初めてです。楷書の作品ということで、ひとつの作品の制作を通じて集中力を保ち続けることに苦労しました。

二七、久田喜朗

創作 行草 『細草幽蘭秋徑馥清風明月夜窓虚』 半切

「秋色を帯びた小径には秋の草々や蘭の香りがただよっており、静かな窓辺に明るい月がすがすがしい風と共に訪れる。」
半切に書くのも行草を書くのも初めてで、色々と苦労しました。

道也和尚其出家之雄乎天水
趙氏世為秦人初母張夫人夢
梵僧謂曰當生貴子 幸広臨

細草幽蘭
馥清風
明月夜窓虚
喜朗書

二八、上原達也

臨書 行書 何紹基『行草山谷題跋語四屏』 半切

「匹紙。子予一挙覆瓢。因為落筆不倦。」

前も書きましたが：つて誰も覚えてないですかそうですか。形臨に挑戦しようとしたところ、手本を見ながら正確に書くという行為は全く持つて自分に不向きであると気付きました。よつて手本を見ながら好き勝手に書きましたが、芸不足の感も。



三〇、頓部李歩子

創作 行書 半切

「五月雨の露もまだひぬ奥山のまきの葉がくれ鳴郭公」

仮名の流れに吸い込まれるような作品を書きたいと思い、とにかく気脈一貫を意識して書きました。まだまだ未熟なので、これからも研究を続けていきたいです。



二九、竹倉功祐

創作 隷書・行書 『清心』 半切1/3 x 2

最近、就職活動やゼミなどで、一日一日が慌ただしく過ぎていきます。そんな日々の中この作品に向き合うことで、ほんのわずかですが心にゆとりのようなものが生まれた気がします。



三一、中原初実

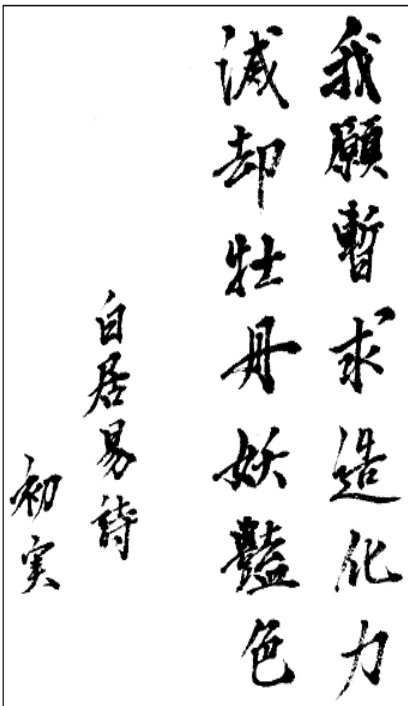
創作 楷書 白居易『牡丹芳』 半切2/3

「我願う暫く造化の力求め 牡丹妖豔の色滅却するを」
大輪の花を咲かせてみたいものです

我願暫求造化力
滅却牡丹妖豔色

白居易詩

初実

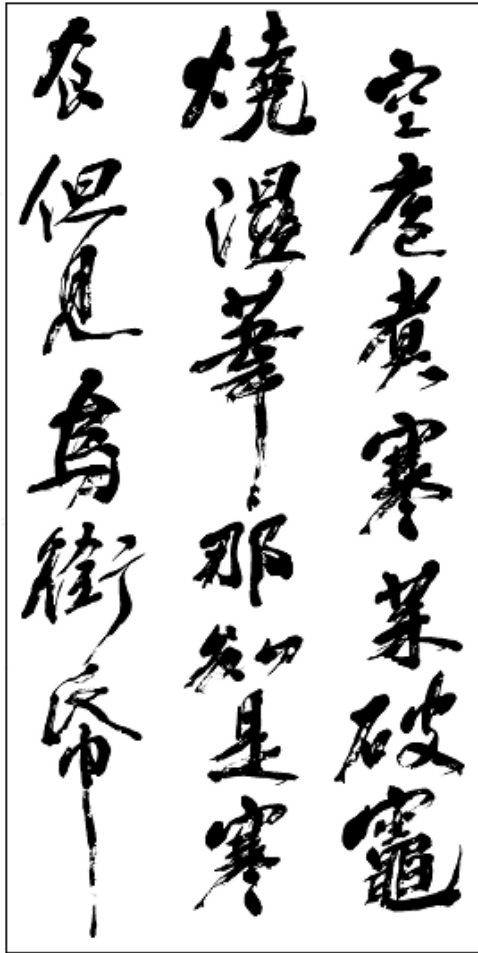


三二、上原達也

臨書 行書 蘇軾『黃州寒食詩卷』 全紙

「空庖煮寒菜，破竈燒濕葦。那知是寒食，但見烏銜紙」

「寒食帖」とも呼ばれ、不運の人生を送った作者の悲憤が滲み出た詩文である。原本では文字や行間が大きく変化しているが、そういった感情の表れを自分の中で昇華し、また新たな自分の作品として構成しようと試みた。



三三、津島 由衣

創作 調和体 『百人一首より』 色紙サイズ

「大江山 いくのの道の 遠ければ

まだふみも見ず 天の橋立」(小式部内侍)

今年の夏休みに母と丹後半島へ旅行に行きました。その土地を歌った和歌を旅の思い出にと、作品にしてみました。

三四、河合直樹

臨書 隸書 『石門頌』 全紙

「(其) 澤南隆。八方所達。益域爲充。高祖受命。」

初めて隸書作品に挑戦です。字形ももちろんですが、殊に趣深い線質こそが作品の「命」なのだと思感しました。

